

研究活動報告

Project 1

黒澤 満

プロジェクト1の研究課題は「国際共生の研究」であり、国際社会における国際共生の現状分析および将来のあるべき姿を研究することである。2014年2月に刊行された『国際共生と何か—平和で公正な世界へ』（国際共生研究所叢書3）では、国際共生の意義を明確にし、平和と国際共生、人権と国際共生、環境と国際共生、開発と国際共生、教育と国際共生に関する各2本、合計10本の論文を通じて、国際共生とは何であるかを検討した。

そこで示した定義によれば、「国際共生とは、国際社会における行動主体の間において、お互いに積極的に努力し協力し、両者にとってともにプラスに働く状況を作り出すことであり、国際社会全体をより平和で安全なまた公平なものにすることを目指すものであり、また個々の主体間だけでなく、国際社会全体の利益を促進するものである。」

現在進行中のプロジェクトは、「国際共生と広義の安全保障」であり、広義の安全保障の諸問題を国際共生の観点から分析することを目的としている。安全保障の概念は近年大きく変更・拡大される傾向にある。伝統的には「安全保障」は国家安全保障であり国際安全保障で、内容は軍事的な安全保障であった。国連憲章の目的である「国際の平和と安全保障の維持」でもそういう意味であるし、日米安全保障条約でもそういう意味である。

近年の安全保障の概念は、誰の安全保障かという側面から「人間の安全保障」と「地球の安全保障」に拡大している。前者は国家ではなく個人に重点をおいた安全保障であり、人権のみならずさまざまな側面で議論されている。後者は地球全体の安全保障という意味で、個別国家の対応では不可能なもので、たとえば環境保護などがこの側面から議論されている。

次は何に関する安全保障かという側面が拡大しており、軍事的な安全保障のみではなく、経済安全保障、エネルギー安全保障、食糧安全保障、水の安全保障、環境安全保障などさまざまな領域に拡大している。さらに共通の安全保障や協力的な安全保障、包括的な安全保障などさまざまな新しい概念が示されている。

このような安全保障概念の拡大の現状をふまえ、広義の安全保障を国際共生の観点から分析するのが、今回のプロジェクトの目的である。このプロジェクトには、本学の研究員（黒澤満、奥本京子、香川孝三、西井正弘、長尾ひろみ）に加えて、千葉眞（国際基督教大学教授）、佐々木寛（新潟国際情報大学教授）、福島安紀子（青山学院大学教授）、佐渡紀子（広島修道大学教授）が参加しており、平和・人権研究会での報告などを通じてプロジェクトを進めており、国際共生研究所叢書4として刊行する予定である。

平和・人権研究会 (Project 1)

第39回 日 時：2014年12月3日

報告者：前田 美子（大阪女学院大学教授）、小野 由美子（鳴門教育大学教授）、中村 聡（広島大学研究員）、細本麻希（鳴門教育大学大学院生）

タイトル：「青年海外協力隊に参加した現職教員の異文化感受性レベルに関する分析」

第40回 日 時：2015年4月29日

報告者：馬淵 仁（大阪女学院大学教授）

タイトル：「アイデンティティ再考」

第41回 日 時：2015年4月29日

報告者：奥本 京子（大阪女学院大学教授）

タイトル：「紛争解決と安全保障—ファシリテーションとメディエーションの役割とは何か」

第42回 日 時：2015年6月24日

報告者：黒澤 満（大阪女学院大学教授）

タイトル：「核軍縮と安全保障」

第43回 日 時：2015年7月29日

報告者：香川 孝三（大阪女学院大学教授）

タイトル：「職場の労働安全と国際共生—バングラデシュ・ラナプラザビル崩壊事件をめぐって」

研究会開催報告

6

研究活動報告

Project 2

Brian D. Teaman

RIICC project 2 has continued its focus on language learning with two presentations this year. In the first presentation on March 2, 2015, Hiroki Iwai of Osaka University gave a presentation entitled “Active Learning Using the iPad in a German class for Beginners and a Multilingual Program.” Professor Iwai, among many accomplishments, has been recognized as an Apple Distinguished Educator for his innovative use of technology in education. He demonstrated how an Active Learning approach can be enhanced with the use of iPads. The first part of the presentation focused on the use of the iPad in a first year German course. He skillfully showed how devices such as tablet computers have replaced many types of hardware used in language teaching until recently. The iPad allows students to do audio and video recording, allows for text input, text to speech and other functions that used to require

specialized hardware and software. iPads also support a growing number of specialized apps allowing for endless opportunities to enhance the learning of foreign languages. In the second part of his presentation, he showed how groups of students were matched with native speakers of little taught languages (Turkish, Indonesian and Vietnamese) with the help of iPad technology to learn these languages. These foreign experts served as models and guides assisted by iPad technology, while Professor Iwai assumed a unique role as coordinator, designer, and facilitator which he summarized as “facilitator.” In this role he guided the process of teaching and learning the three languages which he has no expertise in. This innovative approach to teaching little taught languages, shows another way that new technology can be used to enrich the language classroom.

On June 24, 2015 a presentation was given by Michael Burri

of Wollongong, Australia. Mr. Burri has extensive experience teaching and researching in Japan, Canada, and Australia. He gave a presentation entitled "An Insider's Perspective on Student Teachers Learning to Teach English Pronunciation." He claimed that the impact of language teacher education on cognition continues to remain inconclusive, especially in the area of pronunciation pedagogy. In order to study this question, he explored how the beliefs and knowledge of 15 postgraduate student teachers developed during a pronunciation pedagogy course offered at an Australian university. Following an overview of the study, he discussed findings in light of



the most prominent area of cognition change, native and non-native teacher cognition, and pre-service and in-service teacher cognition. One of his most important findings was that through their experience, teachers tended to change their idea of what the goal of teaching pronunciation was. At the beginning half the students thought accent reduction was or might be the goal of teaching pronunciation, while at the completion of the course over 80% disagreed with this notion. He concluded with implications for language teacher educators and for L2 instructors teaching pronunciation in their classroom. His findings indicate the importance of the role of English varieties and accents in the teaching and learning of English pronunciation.

研究会開催報告

Research on Language Learning (Project 2)

第3回 日時：2015年3月2日

講演者：岩居 弘樹 (大阪大学教授)

タイトル：「iPad と外国語アクティブラーニング—初級ドイツ語と多言語演習の実践事例」

第4回 日時：2015年6月24日

講演者：Mike Burri (The University of Wollongong)

タイトル：“An Insider Perspective on Student Teachers Learning to Teach English Pronunciation”

研究活動報告

Project 3

前田 美子

7

「プロジェクト3：ファシリテーション・メディエーション研究」は、2014年11月に活動を始めた、本研究所の新しいプロジェクトである。「ファシリテーション」や「メディエーション」と呼ばれる、人間社会における関係性構築のための形態について調査・研究を行っている。プロジェクト設立の背景には、近年、教育・市民活動・企業活動等、多岐に亘る分野において、コミュニケーションのあり方、特に、相互理解の促進やコンセンサスの形成などを目的とした人間関係のあり方を模索する動きがあり、「国際共生」を研究するにあたり、この分野の研究は必須であるという問題意識がある。



以下に、これまでの主な活動を列挙する。

- ・ワークショップ「もしあなたが友達から打ち明けられたらどうする？～他人事ではない性被害～」

(2014年11月28日、大阪女学院大学)

大和屋浩子氏 (大阪女学院大学4回生) の企画で、性暴力被害者支援センター・ひょうごの金湖蓮氏を講師に迎え、性暴力をめぐる表現・表象・医療・支援制度等の問題について、15名の参加者を得て議論した。

- ・ワークショップ "Peace Activism in Korea and Northeast Asia: Intervention as a means of peacework"

(2015年5月15日、大阪女学院大学)

韓国で様々な平和活動にかかわっている Kaia Vereide 氏に、済州島における介入 (インターベンション) について紹介していただく。その後、本学在生を中心にした22名の参加者は、さまざまなレベルのコンフリクトにおける創造的な解決の方法などについて議論した。

- ・グローバルイベント「世界一大きな授業」

(2015年5月27日、大阪女学院大学)

世界の教育の現状を世界中で同じ時期に学び、教育の大切さについて考えるイベントを開催した。第1部では、140名の参加者を得て「世界一大きな授業」を実施し、第2部では、14名の参加者とそのファシリテーションの課題について議論した。第1部・第2部の企画・運営・ファシリテーションは、それぞれ、本学の学部生、大学院生が中心となって行った。

これまでの活動に見られるように、本プロジェクトの特徴は、研究所員などの研究者だけでなく、本学の在学生・卒業生や地域の人々の積極的な参画を促していることにある。今後も多方面に開かれたプロジェクトであることを目指していきたい。

研究会開催報告

ファシリテーション・メディエーション研究 (Project 3)

第1回 日時：2014年11月28日

ファシリテーター：金 湖蓮 (性暴力被害者支援センター・ひょうご支援センター運営委員)

タイトル：「もしあなたが友達から打ち明けられたらどうする？～他人事ではない性被害～」

第2回 日時：2015年5月15日

ファシリテーター：カイア・ベレイデ (The Frontiers Action Team member)

タイトル：“Peace Activism in Korea and Northeast Asia: Intervention as a Means of Peacework”

第3回 日時：2015年5月27日

企画者：前田 美子 (大阪女学院大学教授)

タイトル：「『世界一大きな授業』のファシリテーションから学ぶ」